

# 日本小児整形外科学会の過去・現在・未来

ふれあい鶴見ホスピタル副院長

坂 卷 豊 教

## 1. 日本小児整形外科学会の発足当時

1942年の整肢療護園開設，その後1965年10月に国立小児病院がオープンし，ついで需要が一段と高まり神奈川，静岡，兵庫，千葉，埼玉，福岡，滋賀などに公的病院の形で次々と開設されました。この時代は小児整形外科が整形外科の主力であり，どの大学，大手の関連病院にもこれらを扱う人がおりました。小児整形外科が大きな分野であることを誰もが疑わなかった時期であると思います。

日本小児整形外科学会の始まりとされているのは1972年5月，腰野-村上-井澤先生が集まって話をされた時です。1972年は先天股脱研究会(のちの「日本小児股関節研究会」)が始まった翌年にあたります。ちなみにこの時JOA学術集会は5会場，3日間でしたが，小児骨折，先天股脱，大腿骨頭壊死がなんと第1，2会場で行われていたことは現在と大きく異なる疾患構成であることを示しています。

## 2. 日本小児整形外科学会誕生の道

1972～1990年の間，地区ごとに設立された小児整形外科の談話会は集談会と次第に発展していき，東北，関東，中部，京阪神，中四国，九州の集談会が集まって，1987年の東日本小児整形外科学会，1988年には西日本小児整形外科学会を設立するに至りました。これが統合してついに1990年に両者が統合して日本小児整形外科学会となりました(表1)。

第10回日本小児整形外科学会時に発行した『十年の歩み』，ならびに今回学会開催にあたって発刊された『25年記念誌』に学会設立に携わった非常に多くの先生方の発足時の詳細な苦労話が掲載されています。学会規約の制定，役員を選定，各種委員会の設定，事務局設置，会員募集などの仕事を繰り返して1990年11月16日ようやく第1回日本小児整形外科学会学術集会在会長の日本大学・鳥山教授のもとで開催されました(図1)。発足時の会員数は1592名でしたが，後になって会員数は若干減り，現時点では1200名余りとなっております。一方，会員数を見ますと日本股関節学会，日本人工関節学会などは右肩上がりに上昇し，双方ともに2500名を超えています。器官ごとに構成された学会の方にどうしても集まりやすいといえます。他方，日整会の会員数も同様な経過で今では23,000名を超えております。

表1. 日本小児整形外科学会生い立ち

1972年	村上-腰野-井澤氏の会談
	↓
	各地区ごとの談話会，集談会の活躍
	↓
1987年	東日本小児整形外科学会設立
1988年	西日本小児整形外科学会設立
1990年	日本小児整形外科学会設立

1990年11月16日、17日



第1回日本小児整形外科学会学術集会の開催  
(鳥山貞宜教授)  
会員数：1592名



図1. 第1回日本小児整形外科学会と鳥山会長

## 3. 本学会の特徴

本学会は，若い医師への小児整形外科の教育と，積極的な海外交流の2点を大きな目的としている点の特徴です。

1)若手医師に対する小児整形外科教育の一環として

日本小児整形外科学会雑誌の質の高い査読制度があります。内容に少しでも改良してほしいとみられる点があれば返却して、主査・副査2名の査読者により改めて校閲を行います。若手医にとっては異なった校風の査読者により刺激を受けるという査読システムは是非とも続けるべきであると考えられます。



図2. 日本小児整形外科学会発刊の書物

2) 若手医師のためになる「教育研修講演」は積極的に掲載すべきです。最新の知見を含むまとまった論文として格が高いものと考えられます。留学した人の「帰朝報告」、海外の整形外科医による「日本における印象記」もぜひ載せるようにしたいと考えます。これから留学をしようとする人にとって非常に役に立つからです。

3) 教育研修委員会発行の書物やスポーツ委員会発行の書物なども、小児整形外科医師のみならず、一般の整形外科医にとっても必要ではないかと思えます(図2)。基礎的な項目に対し皆が共通の知識を持つことは重要なことであると思えます。

#### 4) 日本小児整形外科学会雑誌の内容—論文数と内訳—

現在年2冊を発行していますが、内容は股関節関連が約1/3を占めています。これは小児整形外科の歴史を見れば当然といえます。先天性内反足を中心とする足部変形も根強く演題が集まる分野です。しかし、先天脊椎異常、乳幼児側弯症、スポーツ障害が外国の小児整形外科学会に比べて明らかに少ない点に気づきます。これに関する演題が多くなることは我が学会のより一層の活性化に寄与することになり、積極的に発表・論文提出を行ってほしいと思えます。加えて日本乳幼児側弯症学会や日本臨床スポーツ医学会に出席して意見交流を行うことが必要と考えられます。日本乳幼児側弯症学会と同時期に、できれば同じ会場で行うことが望まれます。

投稿総数では、8巻から16巻にかけて少なかったためこれに危機感を持ち、日本小児整形外科学会学術集会のシンポジウム、パネルの座長に各演者の論文を集めるようにしました。その効果により論文数は明らかに増加したほか、雑誌の中で論文に区分けが付き、読みやすくなったという効果もあります。

#### 5) 研修システムについて

「小児整形外科」の研修システムは重要ですが、これについては現在の地方・中央単位で行われている教育研修会を利用していただきたいと思えます。また、日本小児整形外科学会学術集会時、他の学会に際して行われる教育研修講演においても小児整形外科疾患を積極的に取り上げていただけるようにしたいと思えます。

近年、小児整形外科の症例が一般の病院では激減したため、日本整形外科学会では主に小児整形外科疾患を扱っている25施設を取り上げて研修の応募・相談をするよう呼びかけを行っています。

#### 6) 海外との交流

先に記したように、日本小児整形外科学会は積極的な海外交流を行っています。韓国、台湾、北米、欧州諸国などとアライアンスを結んでおりますから、これらに積極的に演題を出すことが大切です。近隣の韓国・台湾の小児整形外科学会との相互交流は盛んですが、このほかにはタイ、インドが多く、これらの国々からの多くの若い医師たちで日本小児整形外科学会学術集会時には、賑わっています。

山室-萩原先生のScholarshipはインド、メキシコが多く、先股脱の減少に大きな効力を発揮しています。山室名誉教授のお陰でこれからも続くことになっています。

Asian-Fellowshipでは、日本小児整形外科学会への招待および関連施設の見学を行っています。国分先生の基金により作られた村上-佐野先生-私のFellowshipは、日本人がこちらから出向いて指導・交流

を行うものです。本基金は昨年終了しました。松尾先生の Fellowship は、脳性麻痺治療を援助することを目的としています。岩本-藤井先生の Ambassador は昨年より開始されています。

#### 7) 理事長制の採用

平成 16 年から日本小児整形外科学会は理事長制(任期 6 年)をとっています。平成 16 年からの東北大学・国分教授、平成 22 年からは岐阜大学・清水教授となっており、日整会との風通しも一層良くなり、先の国際交流の点でもより円滑になっています。

#### 4. 結語

1) 現在の日本小児整形外科学会雑誌の査読制度は維持します。

2) 日本小児整形外科学会刊行の書物は積極的に出します。

Multi-center study の結果は速やかに JOS, JPOA 誌に出すことにした方がよいでしょう。

3) 日整会との連携を密接に保ち、日整会学術集会に対しての演題や教育研修講演には積極的に採択していただくようにします。

4) 若手医師に対する小児整形外科の研修システムに力を注ぎます。

5) 積極的な若手の海外交流に努めます。

#### 文献

- 1) 坂巻豊教(発行責任者)：日本小児整形外科学会十年の歩み, 1999.
- 2) 亀ヶ谷真琴(発行責任者)：日本小児整形外科学会二十五周年記念誌, 2014.

#### 筆者連絡先

〒 230-0077 横浜市鶴見区東寺尾 4-4-22

ふれあい鶴見ホスピタル副院長 TEL : 045-586-1717

E-mail : sakamaki@fureai-g.or.jp